

# 除夜の鐘 特集

時が経つのは早いもので、気がつけば今年も師走を迎える時期となりました。みなさんにとって今年はどのような一年だったでしょうか。今号では京の風物詩、知恩院除夜の鐘について特集します。

## 知恩院の大鐘

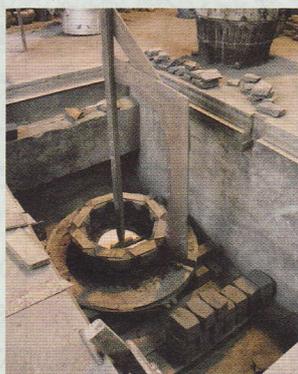
知恩院の大鐘は、寛永13年（1636）に鑄造されたもので、鐘楼は国の重要文化財に指定されています。

高さ3.3m、直径2.8m、重さ約70tという巨大な梵鐘で、奈良東大寺、京都方広寺の大鐘とあわせて日本三大梵鐘の一つに数えられています。

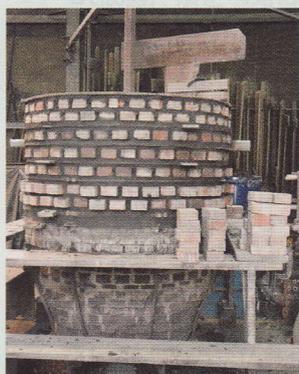
この大鐘が鳴らされるのは、基本的に4月の御忌大会と、12月の除夜の鐘だけです。近年、慶弔の儀式で鳴らすこともあります。が、正式に108打の鐘が撞かれるのは大晦日の除夜の鐘のみで、17名の僧侶によって撞かれます。

## 梵鐘はこうして作られます

今回は梵鐘作りの老舗、京都市太秦にある「岩澤の梵鐘」さんを取材しました。



なかこ中子と呼ばれる内側の鑄型を作る工程



鐘の形を作る外型の製作

梵鐘は現在も千年昔とほぼ同じ製法で作られています。製作には約半年から1年程かかるそう、発注を受けてから1つ1つ手作業

で鐘の形を成型する鑄型を作っていきます。鑄型も昔ながらの製法で、山土と川砂で作っていき、なかこ中子と呼ばれる内側の鑄型と、外型の2つを作り、その隙間に銅と錫の液体（湯）を流し込みます。これを「火入れ」と言い、湯を流し込む速度、温度など様々



工程中最も重要な「火入れ」作業



「枯らし」と呼ばれる工程で梵鐘の音色を調整する

なタイミングによって鐘の鑄上がりが決まります。火入れは約2〜3分で完了しますが、二度とやりなおしのない作業で、職人さんにとっても非常に緊張する一瞬だそうです。梵鐘の音色は、銅と錫の配合率、火入れの具合などによって決まるそう、熟練の業を要します。

火入れの翌日には鑄型が外され、研磨作業がおこなわれます。その後、鐘を露天にさらし、高温になった金属分子を安定させる「枯らし」と呼ばれる養生作業が約半年程おこなわれます。これらの作業を経て、音色の透き通った梵鐘が完成するのです。

取材協力 「岩澤の梵鐘」社長 岩澤一廣氏

※月刊「知恩」2012年12月号に取材内容をさらに詳しく掲載しています（「知恩」の詳細はP11へ）

# 除夜の鐘

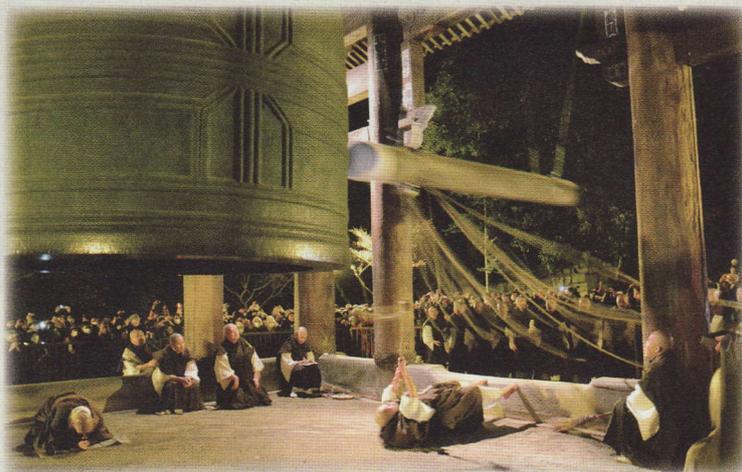
除夜とは「旧年を除く夜」という意味で、12月31日の大晦日の夜を指します。

除夜の鐘は、大晦日に108打の鐘を撞き、その鐘の音を聞くことで煩惱を払い、清らかな心で新年をお迎えるという行事です。

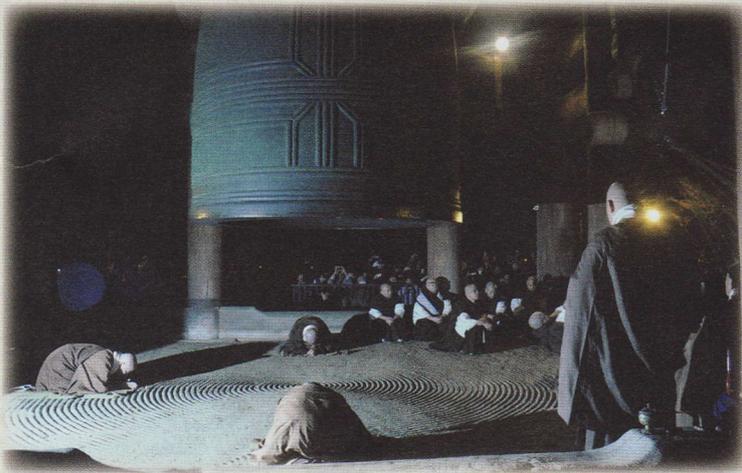
108という数は、私たち人間の様々な煩惱の数を表しています。由来や意味は諸説あり定まっています。

知恩院の除夜の鐘は17名の僧侶によつて撞かれ、特殊な撞き方をします。親綱という太い綱を持った撞手が、「えーい、ひとつ」

という掛け声を発すると、子綱を引く16名の僧侶がそれに呼応して「えーい、ひとつ」と返します。お互いがタイミングを合わせ「そーれー!」の掛け声とともに力強く撞木を引つ張ると、親綱を持つ



僧侶17名で撞く知恩院の除夜の鐘



大鐘の周りでは五体投地の礼拝を行う

た撞手が仰向けにぶらさがるようにして、体全体を使って大鐘を打ち鳴らします。大鐘の重低音が1分以上鳴り響く中、鐘の周りでは役僧が礼拝を行います。

鐘撞きは、大晦日から新年にかけて、年をまたいで108打が撞かれます。極寒の京都で、身を清めた僧侶たちが、人々の罪障消滅と世の安穩を祈つて行う大変厳かな儀式です。



## 知恩院 除夜の鐘 スケジュール

平成24年12月31日(月)

16:30 通常閉門(ご参拝の皆さまは一旦ご退出いただけます)

20:30 鐘楼進入口 開門

22:40 除夜の鐘つき始め

※ 午後11時過ぎに閉門いたします。除夜の鐘の拝観は、午後11時までに境内へお入りいただいた方までです。大変な混雑が予想されますのでお早めにお越しください。